様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 31 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009～2010
課題番号：２１８２００４７
研究課題名（和文）　「凡庸な英雄」の誕生：18 世紀フランスにおける英雄・ヒロイズムの概念の転換
研究課題名（英文）　The birth of “ordinary hero”: transformation of the concepts of Hero and Heroism in 18th century France.
研究代表者
折方　のぞみ（ORIKATA NOZOMI）
明治大学・経営学部・専任講師
研究者番号：１０５４８８２９

研究成果の概要（和文）：
本研究では、18 世紀後半のフランスにおける「英雄・ヒロイズム（＝英雄性、英雄志向性）」の概念の内実が、17 世紀的な「孤高の偉人」から 18 世紀的な「共同体の一員」へと移行・発展・熟成していく過程を、ルソーの英雄論とそれをとりまく思想的状況の分析を通して明らかにすることを目指した。技術＝人為の「進歩」を手放しで賛美する風潮が強い中、ルソーは人為をあくまでも自然の意図の忠実な実現のための手段ととらえる。そして、自然が作ったままの「凡庸な」存在にとどまるために人為を注ぎ込むことに主眼を置くという発想の転換を行うことによって、一部のエリートだけではなく、すべての市民に政治的主体としてのあり方が開かれることとなる。本研究では、こうしたルソーの政治思想が当時のフランスにおいて浸透し、新たな政治的主体としての「能動的市民」の誕生を準備する一因となった背景について調査した。そして、当時の思想的潮流の中にルソーの思想を位置づけつつ、18 世紀後半のフランスにおいて「英雄・ヒロイズム」概念が転換していくプロセスを明らかにすることに、本研究は一定の成果をあげることが出来た。

研究成果の概要（英文）：
This research aimed to show the process through which the meanings of the concepts of “hero” and “heroism” changed in late 18th century France: from hero as “great sage” to hero as “member of the community”. For that purpose, we analysed Rousseau’s thought on “hero” and “heroism”, and also his contemporaries’ thoughts. Art is for Rousseau a means to realize Nature’s purpose. Contrary to other philosophers of the time, he was doubtful about the benefits of the progress of art and technology. Attaching importance to using human art to lead men to stay as ordinary and natural beings, just as Nature has created them and wanted them to be, Jean-Jacques opened a chance not only to few elites, but also to ordinary people to become political subjects in their society. In this research, we tried to clarify the social context of late 18th century France, which accepted Rousseau’s thought and prepared the birth of an “active citizen” who would become a new political subject. In this way, we tried to evaluate Rousseau’s thought in the contemporary stream of thought, and succeeded to clarify the process of the changing meanings of the concepts of “hero” and “heroism” in late 18th century France.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	440,000	132,000	572,000
年度			
年度			
年度			
総　計	940,000	282,000	1,222,000

研究分野：フランス文学・思想
科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学
キーワード：ジャン＝ジャック・ルソー、啓蒙思想、18 世紀フランス、『百科全書』、自然と人為、個人と共同体、英雄・ヒロイズム、リベルティナージュ

１．研究開始当初の背景

革命前夜の 18 世紀後半のフランスでは、貴族的価値観の衰退とブルジョワ的価値観の台頭から、新たな政治的主体としての「能動的市民」の誕生が待たれていた。ジャン＝ジャック・ルソーの政治思想がこの歴史的状況において大きな影響を与えたことは周知の事実である。ジュネーヴ共和国市民の息子でプロテスタントの家に生まれたルソーは、カトリック王国フランスにとってはむしろ「よそ者」であり「異端児」であった。にもかかわらず、本人の意図に反してルソーが「フランス革命の父」とまで呼ばれるに至った経緯はいかなるものだったのだろうか。申請者は本研究開始当初、「英雄・ヒロイズム」の概念が 18 世紀後半のフランスにおいて大きな転換を遂げはじめていたという視点から、そこに大きな影響を与えたと考えられるルソーの英雄論について研究を進めていた。具体的方法としては、主要な政治思想的作品から文学作品と言われているジャンルに入るものまで、多様なジャンルのルソーの作品を対象にした精緻なテクスト分析を行っていた。これは、ルソーの作品の内側から概念転換の契機を探る試みであった。

そして本研究においてはより視野を広げ、同時代の辞典類や他の思想家の作品を調査対象として、当時「英雄・ヒロイズム」の概念がいかに変遷していったのかを跡付ける作業に着手した。そうすることで、18 世紀後半のフランスにおいて、ルソーの英雄論の特徴的視点である「凡人的英雄」という発想を受け入れる思想的土台が、すでに出来上がりつつあったことを検証することを目指した。

２．研究の目的

本研究は、18 世紀後半のフランスにおいて、「英雄・ヒロイズム」の概念がいかなる転換を遂げたのかを明らかにすることを目的としていた。本研究以前の研究において申請者は、18 世紀には「拡張主義者」や「好戦的人物」といった負のコノテーションで使われることの多かった「英雄・ヒロイズム」の概念を、ルソーが意味をずらしつつ救い出したという仮説を論証した。そして、未来のフランスのあり方として予見される「共和国」と、その共和国を担う「能動的市民」というあり方が、ジュネーヴをひとつのモデルとしつつ、理想的な政治的共同体および政治的人間のあり方として言葉の上で「誕生」するプロセスを検証した。

本研究では、以上のようにルソーが「英雄」への到達可能性を一般化して「能動的市民」のあり方に重ね合わせたことを、「凡人的英雄」というタームで説明し、ルソーがこうした独創的なモデルを生み出しえた、そしてそのモデルがのちに受け入れられるにいたった当時の思想的背景に着目する。そして、同時代の知識人達の思想的磁場において、すでに「英雄・ヒロイズム」の概念が共同体の一員といった性質を帯び始めることで意味的転換を遂げつつあったことで、ルソーのヒロイズム論が受け入れられる環境が整いつつあったと仮定する。この仮定の検証を通して、凡人が英雄性を手にする可能性を開いた、旧体制下の社会的・思想的状況を明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

平成 21 年度は、主に 17 世紀から 18 世紀後半までの辞書・辞典類（アカデミーフランセーズ辞典、フュルティエール辞典、トレヴー辞典、『百科全書』など）の版を追った研究と、ルソーと同時代の他の思想家の主要著作のテクスト分析を中心とした研究を行った。こうした作業を通して、「英雄・ヒロイズム」の概念が歴史的に変遷していくプロセスをたどり、18 世紀後半にこれらの概念に意味的な転換が生じていたという仮説を検証した。２月には資料収集目的で京都に短期出張を行った（京都大学）。年度末に、成果の一部をまとめた論文を執筆した。

平成 22 年度は、18 世紀における 17 世紀的な英雄像（孤高の偉人）の受容について、演劇作品や書簡における記述の変遷の調査を通して検証した。そして、「凡人的英雄」という発想は確

かにルソーの独創的視点が生み出したものであるが、それが 18 世紀後半のフランスで受け入れられ、また生き延びた背景には、同時代の思想的状況がルソー的な意味での英雄像やヒロイズム論を受容する準備を整えつつあったことが大きいということを詳細なテクスト分析によって検証した。夏には貴重資料の参照や現地研究者との情報交換を目的とした短期海外渡航（フランス・パリ）を行った。主に国立古文書資料館と国立図書館にて収集作業は行われた。帰国後は成果をまとめて論文執筆を 2 本行った。

平成 23 年 7 月には、国際 18 世紀学会（オーストリア・グラーツ）にて本研究の研究成果の一部を発表する予定となっている。

４．研究成果

平成 21 年度は、17 世紀的な「孤高の偉人」としての英雄像が、18 世紀的な「共同体の一員」としての英雄像へと変化していく過程を、『百科全書』等の 17-18 世紀の辞書類や辞典類における「英雄」「ヒロイズム」の概念、およびそれらをめぐる諸概念の比較分析を通して調査した。また、ルソーの人間論・道徳論と、16 世紀のモンテーニュへの回帰から始まって、17 世紀のパスカル、同時代のモンテスキュー、ヴォルテール、ディドロ、エルヴェシウスらへと続く思想家達の人間論・道徳論を比較分析・整理することで、16 世紀をいまだ引きずる 17 世紀とは違い、様々な価値観がゆらぐことになる流動的な時代である 18 世紀に、英雄像の転換に関与する「新しい人間像」が胎動しているさまを新たな視点から分析・提示を試みた。また、幸福概念の転換が英雄概念の転換とも深く関わっているという確信のもと、「18 世紀における幸福の概念の転換からみた英雄像の変化」という視点でルソーの思想を中心に時代を読み解く試みを行い、その成果の一部を論文としてまとめた。2 月には京都大学への研究調査にいき、ディドロの『セネカ論』に関する諸研究を中心に、関連論文などを調査収集した。

平成 22 年度は、18 世紀における 17 世紀的な英雄像の受容について、当時の小説や演劇、そして書簡における記述の変遷の調査を通して検証した。そして、「凡人的英雄」というルソーの独創的視点が生み出した発想が、18 世紀後半のフランスで生き延びる背景には、同時代の思想的状況が、ルソー的な意味でのヒロイズム論を受容する準備を整えつつあったことが大きいという仮説の論証を試みた。また、夏期休暇を利用して渡仏し、フランス国立図書館や国立古文書資料館などにて資料収集を行った。渡仏の成果として、現地でしか入手できない当時の書簡や手稿、国家機関が発行した様々な文書といった貴重資料を閲覧・収集することが出来たことがあげられる。また、同僚研究者との面会も実現した。「英雄・ヒロイズム」概念の神話化と脱神話化のプロセスを丁寧にたどることで、個々の国家の構成員をいかにして「政治的存在」へと導くのかといった課題に対する 18 世紀からの一定の「解答」を得ることが出来た。

共和主義と新自由主義とが緊張関係にある現代、「英雄・ヒロイズム」の概念は、個人の経済的および社会的な成功と、共同体の安定的発展とのバランスの問題ともからんで、アクチュアルで重要な分析装置のひとつとなっている。本研究において、18 世紀後半のフランスで「英雄・ヒロイズム」の概念がいかなる転換を遂げたのかが一定程度明らかになった。このことにより、18 世紀フランスの政治思想において、「能動的市民が構成員となる共和国」というモデルが歴史的現実を動かす力となって行くプロセスの一端が明らかになった。

今後の課題としては、本研究の意義をより普遍的で現代的な視点から捉え直すことであろう。「凡人のヒロイズム」の重要性を認識し、「公正な不平等」によって「個を生かす共同体」の実現を目指す為の人間形成論をより大きな視点から展開できれば、本研究の成果を現代的なテーマにもつなげることが出来、有用な視点が提示できることと期待される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

(1) 折方のぞみ「『誘惑の場』と『場による誘惑』：人為的空間のアンビヴァレンスに関する試論」『人文科学論集』57 号、明治大学経営学部人文科学研究室、2011、pp. 97-113.（査読なし）

(2) 折方のぞみ「『掟』を破る：自然の秩序と人為的秩序の狭間で －『新エロイーズ』におけるサン＝プルーの例外性 －」『明治大学教養論集』

466 号、明治大学教養論集刊行会、2011、pp. 77-98. （査読あり）

(3) 折方のぞみ「ルソーの幸福論素描：彼岸と此岸の狭間で」『人文科学論集』56 号、明治大学経営学部人文科学研究室、2010、pp. 469-74. （査読なし）

６．研究組織

(1) 研究代表者

折方　のぞみ（ORIKATA NOZOMI）
明治大学・経営学部・専任講師
研究者番号：10548829